

金載元 尹炳炳

感恩寺址発掘調査報告書

(韓国国立博物館特別
調査報告 第二冊)

京城 乙酉文化社 一九六一年刊

もつとも近くて、もつとも遠いのは韓国だといはれている。朝鮮戦争に際して京城博物館、李王家博物館の品々がどうなつたか、梱包されて南にはこぼれたとか、梱包のままにほつてあるとか、さういふ不たしかな情報ばかりきかされていたうちに、アメリカで空前の朝鮮古美術展が、これらの品々でひらかれたときいて、一安心したものである。けれども、隣国である、わが国で、まださういう展覧会をひらくまでに機は熟していない。また、あちらの考古学界や古跡調査事業に関する情報、間接か、また断片的にしききこえてこない。かういうときに、この堂々たる報告書の一冊が、京城からはるばるおくられてきた

ことは、まことによろこばしいことである。

この報告書は、慶尚北道蔚山郡陽北面龍堂里にある感恩寺址の発掘である。感恩寺は新羅文武王の発願で、その子神文王の開羅二年(六八二)に完成した。創建年代のあきらかな点で、その寺の全貌が知られ、出土品がきらかになることは、大いに学界を裨益することとおもはれるが、同時に、その西塔のなから豪華な舍利容器が出土して、またこの報告書の意義を増大せしめている。

感恩寺は慶州から自動車で一時間ばかりのところ、日本海に面した丘のうへにある。海中にみえる大岩は、海龍になつた文武王のゆかりをしめす大王岩の名でよばれている。発掘前は石造の双塔と土壇がのこつているだけであるが、発掘して双塔のうしろに金堂、金堂のうしろに講堂のあることがあきらかにされ、これをとりまく回廊とその中心の中門址とがたしかめられ、なほ金堂と左右の回廊とをむすぶ翼廊のあとも発掘されている。東西・南北とも、およそ七六m、ほぼ方形をなすプランもめづらしいが、金堂が二重基壇の

うへにあることもめづらしい。それに四方の石階もよくのこつていた。

西塔内の舍利容器は第三層中の方龕から発見された。塗金青銅の厨子様のもので、総高三一である。四面に錘鏤の四天王像などがあり、方形の屋根には錘鏤の鳳凰がある。なかには天蓋をいただいた宝帳があり、その中心の宝珠下に水晶の舍利壺を安置している。まったく盛唐様式で、やや土着化したあとがみえる。六八〇年といへば法隆寺の焼失以後十年である。わが国では、まだ飛鳥白鳳調をのこしている時代であるのに、ここではもうすつかり、盛唐調になつている。秀麗な、いはゆる新羅瓦も、すでに成立しているのである。さういう比較ができるころにも、この報告の貴重なところがある。

とにかく、独立後日もなほあさく、発掘調査の要員も、きはめてすくないまま、このよな報告書ができたことは、関係者一同のみなみならぬ努力がうかがはれて、たいへんよろこばしい。今後における、順調な発掘を期待してやまない。(水野清一)